

3、舟渡しその他 つい先頃まで、まだ記憶している人も多かるうが、真渡渡しといって、ぶっかけばがあった。上神指に通じる舟橋で、昭和四年頃までであった。蟹川橋が固定橋になる前は、この方面からしも口といった若松の七日町に出る近道として、よく通った。この舟銭及び舟役銀のことが風土記の書上げにもみえる。

また鮭止めを打ったことも風土記にみえている。下流にダム式発電所が建設される前までは鮭も鱒ものぼった。これに代る意味でもないが、昭和二十五年から手代木卓偉等が河原、湿地の清水の水温が十六度から十八度くらいと、年中あまり変わらないところから、鱒養殖を始め、二十七年に八人共同で、約一〇個ほどのバックをつくって、大規模に始め、一五万匹くらいの養殖をしている。これに四十一年八月から、時代の流行に乗り、釣堀の営業を加えている。

村南に清八壇という三つほどの大きな石くらの壇があるが、これは鈴木清八が河原の開畑、開田をした記念の壇でもある。昔から北会津村東半が、城下町若松のさえんばとして名があったが、真渡部落は特に集約化して、蔬菜栽培が園芸化して、現在は幾軒かのフレームさえ見えるほどである。

4、鈴淵 寛文五年の書上げに、既に二六軒とあって、相当大きな村になっていたが、真渡村の端村となっていて、鈴の社という社はあったが、肝煎も、旦那寺もなく、真渡村に属していた。ただ大竹宅で御用金勤めなどしていたことがあると伝えている。旧大川の河筋の思い堀が村の東端を流れ、白山清水の流れ尻が村中を通ってあわさるので、水に縁は深く、たえず洪水に悩まされてきたらしい。鈴淵という村の名も、大川にえぐりとられた淵でも、村端れにあって、付されたものかも知れない。

下部が砂礫層で果樹栽培の適地であるのに気付き、明治二十年頃、大竹宅で大規模な葡萄園を経営したことがあったので、一時は鈴淵は葡萄の産地としても名があった。明治末から昭和の初めまでは、栽培面積が二町歩に